

平成 26 年 7 月号

## 今月の断酒表彰

- ☆ N・T さん 南千里支部 断酒一年  
☆ Y・R さん 吹田支部 断酒二年

断酒表彰おめでとうございます。ますます  
のご活躍を期待いたします。

## 断酒に思う (49)

### 体験談

南千里支部 K・Yさん

じりじりと照りつける黄色い太陽の下、一本の缶ビールを飲み干すと、体にまとわりつく様なじっとりとした汗が体中に吹き出し、飲む前よりもさらに暑いというよりも熱くなった。その汗を吹き払うように次のビールのプルトップに手を伸ばす。

酒を飲んでいた時の状況を思い出すときまって思い出されるのは、夏のコンビニ前で缶ビールを空けている光景になる。いつもお決まりのコンビニで2~3本のビールを空け、次のコンビニに向うのが日課になっていた。ビールを飲めば汗が吹き飛びすっきりするというのはテレビコマーシャルだけの話で、私の場合は飲めば飲むほど身体に熱がこもり頭がぼうっとした。というよりも頭をぼうっとさせ、何も考えられなくする為に酒を飲んでいただけかもしれない。

周囲の人々が私の飲み方を異常と指摘する様になって、ほぼ30年になる。始めて吐くほど酒を飲んだ経験は高校を卒業した時に同級生の家に4~5人で、泊まり込みウイスキーや日本酒を何本か空けた時だが、尋常ならざる量の酒を飲む様になったのはその数年後だった。

酒を飲むと腕が冴えるとか、頭がはっきりするとか聞いた話を聴くこともあるが、私の場合は今になって思えば何も考えられなくなる、なにも判断できなくなる為に酒を飲んでいただけかもしれない。何かを判断し自分に対して責任を取る事から逃れようとしていたのかもしれない。何も考えられなくなることを望んでいたのだろうか？

最初に就職した企業は今で言えばブラック企業と言える状態であったろうか？当時はソフトハウスと呼ばれていたが、労働者派遣について今ほどチェックが厳しくなかった時代であり、要は、社内教育もせず人間を現場から現場に次々にほうりこんで合法的にピンハネをして利益をあげるというビジネスモデルの企業だった。入社して数年で日本経済はバブル経済に突入していったので、業界全体に労働力の需要はいくらでもありこれを供給する企業は右から左に人間を動かすだけで利益をあげることができた。こうした企業なのでいつも同期や先輩、後輩などで会社の悪口を言いながら酒を飲んでいた記憶がある。

この会社で酒を飲んでの失敗で覚えているのは、渋谷



平成 26 年 7 月 1 日発行 No.137

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

で酒を飲んでいて停めてあるバイクを蹴っ飛ばして何人かに追いかけられた時である。てっきり当時流行りのチーマーだと思って逃げて交番に行ったら、本当にバイクの持ち主であった。この時は6畳の部屋に先輩と二人で押し込まれており、相当ストレスが溜まっていたのであろう。また非常にタイトな毎日夜中の2時頃タクシーで帰るプロジェクトが完了した時も鬱屈がひどかったのだろう、酒を飲んで大阪駅のホームから転がり落ち、駅員さんや後輩に助けられた。

こうした問題に対して自分で考え判断し対応する事から逃れる為に酒を飲むのはもうやめよう。しんどいけれど、しらふで考えていこうと思っている。

## 今月の「指針と規範」断酒会規範

四 断酒会員としての活動は、原則として無償である

われわれの断酒活動は以外に費用がかかる。積極的に取組めば取組むほど金額がかさむ。日常的に聞かれている断酒例会、全断連主催のブロック大会、全国大会、加えて、各地で盛んに開催されている研修会、断酒学校、記念大会等に参加することによって、われわれには過去の飲酒代に匹敵する出費がある。

しかし、同じ出費であっても中味がまるで違う。一方はひたすらに破滅の道を進むための経費であり、一方は新しい人生を生き抜くための経費である。すべてが幸福の追求のために支出されているので、誰も惜しいとは思わない。自前であるのは当然のことである。

酒害相談活動は意外に時間がかかる。相談者は、酒を飲み続けるか断つかの二者択一という簡単なことだとは決して思っていない。酒をやめたくてたまらない半面、飲みたくてたまらない欲求にも駆られているので、そうした心の葛藤が整理されるのに要する説得の時間はぼう大なものになる。

また、酒害相談は夜間だけとは限らない。急を要する相談を受けた場合は昼間でも、自分の仕事を放棄して駆けつけることがある。酒害相談活動に積極的になると収入が減るといのは事実である。しかし、どんなに時間を費やしても、どんなに収入が減っても、酒害相談活動は無償である。

われわれは断酒することによって、自分を愛することができるようになった。家族との愛も復活した。断酒仲間や勿論、自分の周囲にいる人たちまで愛せるようになった。人間愛という最高の愛を自分の手にした今、過去の自分と同じ悩みを持つ人たちに奉仕することは、当然すぎるほど当然なことである。

また、われわれが悩み苦しんでいた頃、先輩会員

がわれわれのためにしてくれたことを思い出せば、  
酒害相談活動が有償であってよいわけがない。

われわれがやっと断酒に踏み切り、酒のない生活  
に喜びを感じ始めたとき、「何かの形で恩返しをしたい」と申し出ると、「同じことを酒で悩んでいる人たちにしてほしい」と断られた。

受けた恩は次の人に、次の人はそのまた次の酒害  
者につなぐことが、断酒会式の恩返しだと教えられ  
た。これは断酒会員ならではの愛であり、断酒会の  
尊い伝統である。

(指針と規範 P59～P61)

